

長谷川伸全集 第十六卷

戯曲Ⅱ 一本刀土俵入 ほか

全十六卷・第十六回配本

一三〇〇円

昭和四十七年六月十五日発行

著者 長谷川伸

発行者 朝日新聞社 角田秀雄

印刷所 凸版印刷

発行所 朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋

装幀 原 弘

帯挿画 岩田専太郎

長谷川伸全集

第十六卷

目次

一本刀土俵入	七
雪の渡り鳥	三四
暗闇の丑松	六〇
刺青奇偶	一〇〇
直八子供旅	一二四
段七しぐれ	一五六
別れ囃子	一九〇
たった一人の女	二二三
長脇差試合	二三七
檻	二六二
伝八恋の引窓	二九三
屋根の声	三二五

総穩寺の仇撃	三三四
百太郎騒ぎ	三六五
越後獅子祭	四〇一
小阪七里の鐘	四二七
おふくろ道中	四四三
明日赤飯	四六五
虎御前	四九〇
九十九両	五〇六
長谷川伸年譜	五三七
解説 村上元三	五六二

戯曲Ⅱ

一本刀土俵入

ほか

一本刀土俵入 二幕五場

〔序幕〕 第一場 取手の宿・安孫子屋の前

第二場 利根の渡し

〔大詰〕 第一場 布施の川べり

第二場 お蔦の家

第三場 軒の山桜

駒形茂兵衛 老船頭 筋市

お蔦 清大工 河岸山鬼一郎

船印彫辰三郎 お君 酌婦お松

船戸の弥八 いわしの北 同 お吉

波一里儀十 籠彦 博労久太郎

堀下げ根吉 おぶの甚太

伊兵衛・女房おみな・料理人・帳付け・通りがかりの人々・近所の人々・赤金の升・盆持ちの良・渡しの船夫・渡しの客・子守子（一・二）八公・買物の男女・そのほか。

〔序幕〕

第一場 取手の宿・安孫子屋の前

常陸の国取手は水戸街道の宿場で利根を越えると下総の国。渡しはその近くにある。

取手の宿場街の裏通りにある茶屋旅館で安孫子屋の店頭は、今が閑散な潮時外れである。それは秋の日の午後のこと。

（安孫子屋は棟の低い二階建て、前と横とがT字型に往来になっている。角店のこの家は突っつきが広い土間、その他は外から余り見えない。階下と二階の戸袋は化粧塗りの漆喰細工で、階下は家号を浮きあがらせた黒地に白、二階は色漆喰の細工物で波に日の出）

（安孫子屋の角柱の処に菊の鉢が一つ置いてある。外側の窓の脇に榎の老木があり竹垣を四方に結ってある。その中で秋草が少し咲いている）

（二階は三尺障子が閉まっている）

店の前に料理人、帳付け、酌婦お吉、お松、その他が立つ

て、道路の向うでしている喧嘩の方を見ている。そっちの方から喧嘩する男の声が聞えているが、だれの眼にもまだ見えていない、二階では近在からきている放蕩者が、酌婦を相手に遊んでいると見え、三味線の爪弾きの音が聞える。

料理人 （爪先立ちをして喧嘩の方を見る）

お吉 （料理人に） 見える。

料理人 うんに見えねえ。

お松 （少し酔っている） こんな時はのッぽが得だと思ったらそうでもないんだね。

料理人 何をいやがる。おッ、人が出てきた。

お松 まさか鬼は出てきっこないさ。

帳付け お松どんお前また酔ってるな。酔うもいいがお前のは質がよくないからなあ。やあ、人がみんな押し出されたように横町から出てきたぞ。

子守子 （息せき走ってくる）

料理人 あれッ雪崩を打って人が——あ、駈ける、みんな駈けてこっちへ来る。

お吉 （子守子を捉まえそうにして） だれが喧嘩してるんだい。

子守子 船戸の弥あ公なんだよ。

お松 えッ、弥八の奴また喧嘩か、仕様のない男だねえ、あれと来ちゃあ。

帳付け お松どんそんなことを当人の前でいうじゃないぜ、頭を半分ブツ欠かれるか知れないからなあ。

お松 いくらあたしだって、真逆あの無法者の前じゃ、迂濶に口を聞きやしませんよ。お蔭さんのいい草じやないが、体をやくざに持扱ってしまっても、まだこれで命は惜しいや。

料理人 (熱心に見続けている) あッ有難え、喧嘩はどうとうこっちへ流れてきそうだ。やあ、追っかけてるのは弥あ公だが、逃げてくるのはどこかの若夫婦らしい。

お吉 あれッ、だれだか、仲人にはいった——。

お松 どれどれ。

帳付け (お松に) おいおい、滅多なことはいっちゃいけないよ。家が迷惑するから。

お松 (耳にもかけず) ありや二、三日前に中食をしてっ
た日光街道の木崎の博勞だよ。

帳付け 叱ッ叱ッ、黙った黙った。

お松 (口を掌で叩き) あわわわ。

土地の男女が逃げるようにやってきて、二つの群れとなり、二つの道の端に佇んで喧嘩を見ている。婚礼して間もないらしい若い夫婦伊兵衛、おみなが、手を執り合って逃げてくる、後から船戸の弥八(二十八、九歳)船夫にて乱暴者が追いかけて来る。

弥八 (伊兵衛を捉える) 何をしやがる。(振り払う伊兵衛を

又捉えて引戻す)

おみな (夫の大事と引返し、おろおろと伊兵衛を氣遣う)

博勞木崎の久太郎(四十二、三歳)仲裁しようとて弥八に追いつく。

久太郎 哥兄や、まあさ、勘弁してやってくれ。当人だって詫びをいつてるんだ。なあ、もういい加減に勘弁してやってくれ。俺からも頼むからよ。な、もういいだろう。根も葉もあることではねえ、足を踏んだ踏まねえの喧嘩じゃねえか。

弥八 厭だ。

久太郎 何ッ。(むッとしたが、氣を取り直し) そういったものじゃねえ。

弥八 黙ってろい。借せッ。(久太郎が持っていた馬の杵を奪って、伊兵衛を打つ)

おみな あれッ。(伊兵衛を庇わんととして、弥八に打たれる)

伊兵衛 (憤然として弥八の腕を押え) 温和しくしていればいい気になり、畜生に穿かせる物でよくもぶったな。

おみな (おろおろと伊兵衛に取り縋り、何かいおうとすれど声が出ぬ)

弥八 馬の杵でヒッ敲いてやった、それがどうした。

久太郎 どうもしねえ、こうしてやらあ。(馬の杵を引ッ手繰り弥八を打つ)

弥八 あ痛え。やい止せ、痛えやい。(久太郎から馬の杵

を奪わんとする)

久太郎 (いっかな放さず) この野郎。いい加減にのさばれ。

弥八 寄越さねえと蹴殺すぞ。

伊兵衛 (弥八の脚をとって引く)

弥八 あわわ。(引ッ繰り返る、直ぐ起きあがるを、久太郎が馬の脊で打って倒す、又起きるを伊兵衛が蹴り倒す)

久太郎 ちッとは懲りたか、この大馬鹿野郎。

伊兵衛 顔をよく見憶えたから、川向うへ来てみるがい、ただでは帰しはしないから。

弥八 (瓦破と起き) 待つてろッ。(安孫子屋へ飛び込む)

料理人 あれッ。(家の中へ向って) 庖丁を片付けろ、庖丁を、(駆け込む奥の方で声がする) 庖丁を。(帳付けその他も駆け込む)

久太郎、伊兵衛夫婦は別々の道へ走って去る。見ていた男女も傍杖を恐れて去る。お松とお吉だけが、家の前に小さくなっている。家の中でドタバタ音がする。皿の壊れる音、棚から物の落ちる音などがする。

弥八 (声) 退きやがれ。あ奴等突ッ殺しちゃうんだ。退けえッ、退けッ。

料理人 (声) 何を乱暴するんだ、いけねえったら、放せ、あッ危ねえッ。

二階の障子が開いて、酌婦お蔭(二十三、四歳)ほろりと酔った顔を出す。

お蔭 (口に啣えた楊子を吐き棄て、店の奥を覗き加減に見る、

が見えないので、居どころを替える)

弥八 (刺身庖丁を持ち、肌脱ぎとなり、往来へ飛び出す)

料理人その他が店の入口まで追って出る、それから先へはだれも進みぬ。お吉とお松とは店へ駆け込む。

お蔭 (柱にもたれ、髪を櫛で掻きながら下を見ている)

弥八 さあど奴もこ奴も命をフン奪ってやるから出てこい。さあ。(ギロギロ見廻し) 畜生、みんな隠れやがったな。

駒形茂兵衛(二十三、四歳位)汚ない単衣物一枚、素足に草鞋を穿く、力士志願で親方を取り、漸く付け出しにはなつたが、前途がないと親方に見限られ、旅興行先で追い払われて通りかかる。

茂兵衛 (何とも知らず来り、弥八に行き合う)

弥八 (庖丁を擬して睨む)

茂兵衛 な、なにをするんだ、わしが知るものか。

弥八 野郎ッ。(逃げ廻る茂兵衛を追い廻す)

茂兵衛 (空腹のために、よろめき勝ちで、再々危うくなる) わしは何も知らぬ、な、なにをするんだこの人は。(逃げ廻る) 料理人その他はハラハラするのみで、挺身して弥八を押える者が無い。

お蔭 (じっと見ていて、疳癪を起し、盥洗をとって水を弥八に浴びせる)

弥八 ぶッ。(顔を片手でツルリと撫ぜる)

お 薦 水をかぶって少しは気が落ちついたかい弥あ公。
 弥 八 何だあ。(二階だと心づき仰ぎ見て) 手前お薦の阿魔
 だな。

料理人 (素早く弥八の手から庖丁を取ろうとして仕損じる)

弥 八 何をしやがる。(庖丁を振り廻す)

料理人 うわッ。(店へ逃げ込む)

茂兵衛 (喘んでいる息を安めている、弥八の行動に眼をつけ、時
 時はッとする。二階のお薦にも眼を向ける)

弥 八 やいお薦、よくも俺に水をヒッかけやがったな。
 下へこい、叩ッ斬ってやるから。

お 薦 何をいってるんだい。

弥 八 降りてこねえな。ようしッ、俺の方から押掛^{おしか}けて
 行^いってやる。

お 薦 来られるなら来るがいい、ここにいるお客さま
 を、だれだと思ってるんだ、流れの三太郎親分だよ。

弥 八 えッ、俺ンとこの親分がきてるのか、こいつはい
 けねえ、本当かい。

お 薦 嘘だと思ったらあがつといで、親分に叱られるの
 も稀^{たま}にや面白いだろう。

弥 八 (庖丁を抛り出し) べら棒め、面白く叱られる奴があ
 るもんかい。(茂兵衛に) やい、手前よくも俺を大勢と一
 緒になつて殴りやがったな。

料理人 (庖丁を拾いとり、傍にいる男に板場へ持たせてやる)

茂兵衛 わしは今ここを通りかかったばかりで、何があっ

たか、ちッとも知らないのだ。

弥 八 胡麻化すな。俺は殴られている時に、ちゃんと
 眼を開いてたんだから、どんな奴とどんな奴が殴ったか
 知ってるんだ。手前も確かに俺を殴った。

茂兵衛 そんな難題を吹ッかけては困る。

料理人 その人のいう通りだ。弥あさん、お前を殴ったの
 は、さっきの博労と若え男とだけだ。

弥 八 手前の知ったことか。(茂兵衛に) 手前、職は何だ。

(どこの三下かの意)

茂兵衛 角力^{すもう}取りになっている。

弥 八 取^とりのか。

茂兵衛 そうだ取^とりだ。横綱でも大関でも、一度はみん
 な取^とりだ。

弥 八 ふんどし担ぎめ、豪儀^{ごうぎ}そうな口を听^きく。さあ
 野郎、俺と一緒に利根川^{とねがわ}沿^{べり}へこい、二、三番揉んだ揚
 句、川の中へ飛び込ませてやる。

茂兵衛 水ならもう充分だ。

弥 八 手前泳ぎを知らねえのか、犬ッ掻^{いぬか}きも出来ねえの
 か。

茂兵衛 なあにそうでない、わしはきのうから水ばかり飲
 んで。(はッと心づいて) 水中^{みずうた}りが怖いからだ。

お 薦 (頬杖^{ほづえ}をついて見下している) 取^とりさん、そんな人
 に交際^{つきあ}ってないで、さッきと行^いっておしまい、とどの詰
 りは、二つ三つ殴られた揚句に、いくらか銭をとられち

まうよ。

弥八 (お蔭を睨む)

茂兵衛 なあに、銭なんか一文もない。

お蔭 へええ。一文なしで何処まで行くの。

茂兵衛 一先ず江戸へき。

お蔭 ここから千住までだって八里あるよ。第一、その川を渡るったって、十六文銭がいるんだ、それを一文なしでどうするんだい。

茂兵衛 どうにかなるだろう。

弥八 一文なしと聞いちゃ、可哀そうで殴れもしねえ。

お蔭 可哀そうだって、あたしあ又、一文なしと聞いて、落胆かつかりしたというかと思った。

弥八 厭いやなことばかりいう阿魔だ。

お蔭 前世では敵同士だったかも知れないね。

弥八 家の親分が惚れてなきや。とツクの昔に腕の一本ぐらいヘシ折ってある阿魔だ——何だってこんな阿魔ちよの、どこが好いんだ。

お蔭 そういつて親分に聞いてごらん、何て返事するか。

弥八 知らねえ勝手に喋舌しゃべれ。(行きがけの駄賃に茂兵衛に向い)野郎。(蹴倒す)ヘッ、大飯食いの癖に弱え奴だ。

茂兵衛 (よろよろと倒れて)待て。(起きあがり)よいしょッ。

(弥八の胸下に頭搦うづきをくれる)

弥八 あッ。(引ッ繰り返り、慌てて起きかけ、へたへたとな

る)

茂兵衛 (力なくよろめき、辛くも踏止まったが、へたへたと坐る)

弥八 この取りのめ。ああ痛え。(蹴ひきをひく如く、搦ひかれたところを押え)てッて。てッて。(折り曲って去る)

お蔭 (弥八が倒れるのを見て喝采し、茂兵衛が意気地なく坐るのを見て憫あはれる)

お松 (お吉に)この人、病人らしいけど、さすが取りのでも力士は力士だねえ。

料理人 (門口に出て弥八の後姿を眺め)ヘッ、弥あ公の無法者も頭搦うづきを一本カマされて、耐こたえたと見えて、海老みたいに体を曲げて歩いてやがる。いい気味だなあ。

お松 (お吉に)だけどさあ。(茂兵衛を指さし)あれじゃ色気がなさ過ぎるね。いくらあたしでも、これを客に取れといわれたって願いさげだ。からだらしが無さ過ぎるもの。

お吉 そりゃそうだよ、あたしだってさ。まだ弥あ公の方がいくらか増しだ。

お蔭 そうかねえ。

お吉 (前へ出て二階を見あげ)お蔭ちゃんてばきつきから、いつもの伝でポンポン弥あ公に当たってたけど、いいのかえ。

お蔭 どうなったって構やしないさ。

お松 (お吉に)およしおよし、あの人のお株かぶなんだ。何

をいったって徒勞^{ひた}き。やけくそな女なんだからねえ。

茂兵衛 (漸く立ちあがり) もし、水を一杯飲ましてくれま
すまいか。

料理人 水ならその先に井戸がある。遠慮なく沢山^{たくさん}飲んで
行きな。(他の者に) 今の草双紙の読み続きを聞こうぜ。
八、読んでくんな。

八公 ええ。(料理人と共に内へ去る)

お吉 あたいも聞こう。(お松の手をとり) お出でよお前
さんも。

お松 暇ッ潰しに聞くなねえ。(お吉と共に内へ去る)

茂兵衛 (井戸の方へ行き、飲みおわって戻り) ごッそあんで。

(去りかける)

お薦 ちよいとちよいと、

茂兵衛 (振り返ってお薦を、ちょっと見ただけで歩く)

お薦 取り的^{とりてき}さん、お前さんと呼んでるんだ。

茂兵衛 わしか。何だね。

お薦 お前さんどこが悪いんだ。

茂兵衛 おなかさ。

お薦 食い過ぎたんだね。

茂兵衛 根ッから食わないからいけないんさ。

お薦 あ、そうそう、一文なしだといったつけねえ。

茂兵衛 乞食の真似すれば、人が銭をくれるとって教え
てくれた者があるんだ。

お薦 する気かえ。

茂兵衛 するもんか。わしは立派な関取になるんだからな

あ。

お薦 親方がそういったのかい。見込みがあるとか何と
か。

茂兵衛 親方は、見込みがないといった。

お薦 へええ。それでも立派なお角力さんになれるのか
ねえ。

茂兵衛 なれるさ、わしは一所懸命なもの。成れなかった
らわし、どうしていいか判らなくなるなあ。

お薦 国はどこさ。

茂兵衛 上州だ。勢多郡の駒形^{こまがま}という処だ。前橋から二里
ばかりの処さ。

お薦 成り損^{そく}ったら田舎へ帰って、鋤^{すく}鋤^{くわ}を握るさ、家は
お百姓なんだろう。

茂兵衛 家か——家は灰になった。

お薦 焼けちゃったのかい。それで今、家がないの。

茂兵衛 無い。

お薦 親兄弟が田舎にいるんじゃないのか。

茂兵衛 わしは一人ッ子。おやじは何処かへ行ったまん
ま、二十年も使^たりがない。どこかでどうにか成ったんだ
ろう。

お薦

お薦 お母さんだけいるんだね。

茂兵衛 ああ居るよ。駒形の上広瀬川^{かみひろせがわ}が見える処に。

お薦 なあんだ、家があるんじゃないか。

茂兵衛 なあに、そこはね、お墓さ。

お 薦 (急にホロリとなる)

茂兵衛 姐さんはここのおかみさんですか。

お 薦 酌とり女さ。白粉で面の皮が焼けてる阿婆摺れさ。

茂兵衛 阿婆摺れだって、そんなことはない、わしはそう
思わない。(頭をさげて行きかける)

お 薦 お待ちよ取りのさん。お前、れっきとした親類は
ないのかえ。

茂兵衛 無いこともないが、わしに構ってくれる者はな
い。

お 薦 みんな気を揃えて薄情でいやがるんだねえ。取り
的さん、お前、本当に、精出して立派な関取におなり、
辛いことがあったら、その薄情な親類どもの顔を思い出
して、一所懸命おやり、出世したら故郷へ錦を飾って、
薄情揃いの奴等に、土下座させておやり、屹といいい気味
だよ。

茂兵衛 いやあ、わしは親類の者に見て貰いたいとて、立
派な関取にはならないんだ。

お 薦 おや。ああ、見せて喜ばす可愛い女があるんだね
え。ホホホ、安くないねえ。

茂兵衛 わしは、故郷のお母さんのお墓の前で横綱の土俵
入りをして見せたいんだ、そうしたら、もう、わしは良
いんだ。

お 薦 取りのさん、お前さんもお母さんが恋しいのだね
え。夢をよく見るだろうねえ。

茂兵衛 当り前だ。姐さんのお母さんも死んでしまったの
か。

お 薦 あたしのお袋は生きてるのさ。
茂兵衛 そんならわしより少し増しだ。

お 薦 なあに——生きていたとて、どうで満足には暮し
ちゃいないに極まったらあ。

茂兵衛 どうしてるか知らないのか。

お 薦 遠いんだよ、国が。だもの、判りゃしない。

茂兵衛 どこだ。

お 薦 信濃の善光寺様よりもツと先き、越中富山から南
へ六里、山の中さ。

茂兵衛 信州から先なら、わしはまだ知らない。

お 薦 (思い出して泣けてくる顔を隠すとて、後向きになり、声
を低めて唄い出す、故郷の名物、八尾の小原節) おらちゃ友
達や、さたね(菜種)の花よ、ハア、どこいしょのしょ。

茂兵衛 (お薦を見あげ、黙って行きかける)

お 薦 (唄いつづける) 盛り過ぎればオワラちらばらと。
取りのさんちよいと。

茂兵衛 まだわしは八里余り歩かなくてはならないのだ、
行くよ。

お 薦 利根川の渡し船は十六文だよ。(帯の間から巾着を
出して投げてやる)

茂兵衛 え。

お 薦 食べる物をあげたいけど、ここの家は客ッ垂れで話にならない。あたしの身上ありったけやるから、どこかで何か食べてお行き。

茂兵衛 貰って行ってもいいのか。後で姐さんお前が困りやしないか。

お 薦 あたしあ、年がら年中困りつづけたから、有っても無くっても同じことさ。遠慮しないで持ってお行き。

茂兵衛 半分貰います。

お 薦 客ッ垂れな、今に横綱になる取りのさんじゃないか。

茂兵衛 だってな、わしも一文なしで困ってきたんだ、姐さんだって一文なしでは。

お 薦 やけの深酒は毒と知りながら、ぐいぐい呷って暮すあたしに、一文なしも糸瓜もあるもんか。お前さん大食いだろうから、それじゃ足りない、これもあげるから持ってお行き。(櫛と簪を髪からとる)

茂兵衛 いいよ、いいよ、そんなに貰わないでもいいよ。

お 薦 持って行くんだよ。(扱帯に櫛簪を結びつける)

茂兵衛 へえ。

お 薦 (扱帯をたらし) さあ受取んな。何を愚図愚図してのさ。おや厭だ、泣いてるの。

茂兵衛 わしこんな女の人にはじめて逢った。

お 薦 横綱の卵は泣きベソだねえ。早くお取り、人が見

るとおかしいよ。

茂兵衛 へえ。(櫛簪を手にとる)

お 薦 (扱帯を引きあげ) もし、だれかに咎められたら、あたしに貰ったとおいい、出る処へ出て明りを立ててあげるから。

茂兵衛 姐さんは、名を何というんでしょう。

お 薦 まだいわなかったね。取手の宿の安孫子屋にいるだるまで名はお薦、越中八尾の生れで二十四になる女だとはつきりいっておやり。

茂兵衛 へえ。(口の中で記憶するために繰返している)

お 薦 その代り、取りのさん、屹とだよ、立派なお角力さんになっておくれね。いいかい。そうしたら、あたし、どんな都合をしたって一度は、お前さんの土俵入りを見に行くよ。

茂兵衛 あい——あい——屹となります。横綱に屹となつて、きょうの恩返しに、片屋入を見て貰います。

お 薦 どこへ飛んで行くか知れない体だけれど、楽しんでにして角力が興行にきたら番付に気をつけてみるよ。

あ、取りのさんの名は、まだ聞かなかったつけねえ。

茂兵衛 わしの親方の名は立科磯右衛門と申します。

お 薦 旅先から銭もあてがわずに追い返すような親方の名なんかどうだっていい。

茂兵衛 銭は六百くれました。これで何処へでも行けといつて。けど、みんな食ってしまった。